（仮称）印西市歴史文化施設基本計画（案）

市民意見公募（パブリックコメント）の結果

<table>
<tr><td>案　　件</td><td colspan="3">（仮称）印西市歴史文化施設基本計画（案）</td></tr>
<tr><td>募 集 期 間</td><td colspan="3">令和５年１２月２５日（月）～令和６年１月１４日（日）</td></tr>
<tr><td>意 見 の 提 出</td><td colspan="3">９件（２名）</td></tr>
<tr><td>意 見 の 種 別</td><td colspan="3">全体（１件）、事業活動計画（２件）、施設整備計画（１件）、
施設整備計画及びデジタル環境計画（１件）、展示計画（４件）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">意見の取扱い</td><td>既記載</td><td>既に案に盛り込んでいるもの</td><td>２　件</td></tr>
<tr><td>参考</td><td>案には反映できないが今後の参考とするもの</td><td>７　件</td></tr>
</table>

市民意見公募（パブリックコメント）における意見と意見への対応

No.	該当ページ	意見の概要	意見の取り扱い	対応
1	P33～38	「常設展示はいつ見ても同じ」というイメージが利用者の中で多く、入館者数の伸び悩みに繋がる一因となっている。 そのため、毎年数か所の展示コーナーが変わる手法（フレキシブル展示）を取り入れたらどうか。 それにより最新の調査成果を市民に示すことができるとともに、常設展示のマンネリ化を防ぐことができる。	参考	P33. 展示計画では常設展示を含めた展示の基本方針において、「柔軟な変更が可能なレイアウトの展示とします」としております。 具体的な手法につきましては、展示設計を実施する際の参考とさせていただきます。
2	P36～38	ここ 30 年程のデジタル機器を用いた展示には目を見張るものがあるが、これは必要最低限に絞り、極力避けたほうが良い。 デジタル機器の保守点検には毎年かなり高額な維持・保守費を必要とするため財政的な圧迫が大きく、特に税収が落ち込んだ時のマイナスシーリングが続くと保守費用の確保が難しくなる。 そのため故障が発生しても修理ができず、長期間にわたり「調整中」の貼り紙を出すことになり、利用者の利便性を大きく損ねる結果に繋がる。 また、それらのシステムには設置した展示業者特有のノウハウが詰め込まれており、他の業者では保守ができないことが多く、コスト削減に繋げられないことがほとんどである。	参考	具体的な展示の手法に関するご意見として、参考とさせていただきます。
3	全体	展示業者は、造作などを行うことにより売上を確保することが仕事なので、様々な提案をしてくる。 しかし、それに乗りすぎると実物による展示の本質から離れてしまい、単なる見栄えだけの演出の場となってしまう。 博物館は主として実物資料を通して地域を語らせる場なので、学芸員がその資料に「何を語らせ、何を人々に伝えたいのか」をベースに、その補助手段としての演出に留めてほしい。	参考	本施設および展示の在り方について、参考とさせていただきます。

No.	該当ページ	意見の概要	意見の取り扱い	対応
4	P21	教員の歴史、特に地域の文化に対する知識は非常に低いという現実がある。 教員にはそれぞれの科目ごとに部会があると思われるので、社会科部会と連携を行い、印西市を中心とした歴史を勉強する研修会を定期的に開催するのが有効と考える。 そのような中で夏休みの課題に郷土史を取り入れてもらうことも可能になり、子供が博物館を活用する入口にもなる。	既記載	P21.事業活動計画　E：学習・創造支援において、②－２．学校教育との連携として、教員向け講座の実施が記載されています。 具体的な手法につきましては、参考とさせていただきます。
5	P21	出前授業が項目に上がっていたが、これはやめたほうが良い。 出前という性質上、教員の立場からすれば非常に安易に助かるシステムだが、これをしてしまうと博物館には子供は来てくれなくなる。 時々、「出前授業をきっかけに博物館に興味をもって来てくれる」といったことを言う人がいるが、それは大きな妄想に過ぎず、そもそも校区外に住む子供達がいつでも自由に博物館に来られるとは思えない。 また、出前授業に持参できる資料点数は少なく、それよりも博物館でその10倍、20倍、30倍の実物資料を見せた方が子供にとっても大きなプラスになる。 小学校で歴史を学習するのは6年生であり、市内小学校の全6年生を対象に校外学習の一つとして博物館で本物の歴史資料を見せ、時には触らせながら地域の歴史を学習する機会を設けるのも一案である。費用は博物館の普及費もしくは学校教育関係の部署でバス借上費を計上しておけば実行可能である。 例えば、「ふるさと文化ふれあい事業」のような事業枠をつくり、午前中に博物館、昼食後に木下地区や整備された古墳などの現地見学を行うということも一案である。 印西市の子供の主体はニュータウン地域だと思われるが、そこに住む子供たちは親も含めて他所からの移住が多いため、印西市の文化の源である利根川の水運や伝統ある木下の街についての知識は皆無に等しいと思われる。 そうした意味からも、出前授業という座学ではなく、博物館で本物に触れる必要があると考える。	参考	事業活動に関するご意見として、参考とさせていただきます。

6	P27	施設の設置場所については、ランドマーク的な建物を予定とのことで、遠方からも視認しやすく、施設からの眺望も良い歴史資料センターのある交流の杜が適した場所であると考える。	参考	施設の立地に関するご意見として、参考とさせていただきます。
7	P28・31 P40～45	事業計画に記載されている収蔵資料データベースの構築と現在の施設にはない資料閲覧室の設置を望む。	既記載	収蔵資料データベースについてはP40～45に、資料閲覧室についてはP28･31にそれぞれ記載されています。
8	P33～38	展示について、交流の杜に設置するのであれば、現代との比較がしやすいように利根川と街並みが眺望できるガラス面に、プロジェクションマッピング等で往時の木下河岸を投影し、利根川を行き交う高瀬舟や木下茶船、立ち並ぶ旅籠・商家、朝から忙しく働く人足や旅人、参勤交代の様子、夜は宿から流れる三味線の音など、賑わいを視覚や聴覚で表現できるとイメージしやすいのではないか。 また、ＶＲ等を使用して、木下街道を江戸から来た旅人の視点で追体験（金草鞋に書いてあるようなことや問屋場の手続き、乗船、船中の様子等）ができるようなものがあると良い。	参考	具体的な展示の手法に関するご意見として、参考とさせていただきます。
9	P33～38	昨今では方言を話す人が少なくなった。近年住民になった人は、印西は方言がない地域と認識している人も多いのではないかと思われる。印西地方の方言の解説（市内でも地域によって若干異なるかも知れないが）、印西地方のアクセント、方言で表現した日常会話例、伝承や物語等の音声展示があれば良いと思われる。	参考	具体的な展示の手法に関するご意見として、参考とさせていただきます。